ま・ち・か・どズームIN!

みなさんからのすてきな情報を待ってます!

男女共同参画社会推進条例施行から１年

ホワイトキューブで記念イベント開催

男女共同参画社会づくりへの啓蒙・法的根拠として昨年６月に施行された、男女共同参画社会推進条例の施行１周年を記念して、６月28日、ホワイトキューブで、仙台市長をはじめとする県内５市町の首長による「トップサミット」などの記念イベントが満員の聴衆を集めて盛大に開催されました。

■ビデオとお話

「国際結婚の共働き家庭」

中国の北京と越河に生活の拠点を置く張司紅さんをお迎えし、仕事と子育て、家族のあり方を考えました。

張さんは、多忙な日々を支えてくれる日本と中国の家族への感謝を語り、「一度だけの人生、自分の夢を大切に！まず自分を幸せに、そして家族を幸せに」と聴衆に訴えました。

■男女共同参画推進自治体

トップサミット

白石市がホスト役となり、男女共同参画社会に向けて熱心に取り組む仙台市、角田市、柴田町、亘理町の首長が一堂に会し、取り組み状況や今後の展望などを語り合いました。

そして、特色ある施策により、一人ひとりがいきいきと暮らせる男女共同参画のまちづくりを目指すこととした共同宣言を採択し閉幕しました。

町中を和紙のあかりで埋め尽くそう

白石和紙あかりプロジェクト

まちおこし活動に取り組む市民有志「蔵富人」の企画で、白石和紙を使ってあかりを作り、町中をあかりで埋め尽くそうと、約70人が参加して、寿丸屋敷であかり製作ワークショップが６月から開催されました。

参加者たちは、張り子型のものや骨組み型のもの、色を塗ったり木の枝を使ったりと、好みに合わせてさまざまなあかりを製作しました。

独特の温かみを持つこのあかりは、８月11日の夏まつりの夕方４時ごろから、寿丸屋敷で一堂に展示するとのことです。ぜひご覧ください。

創立130周年記念誌制作に向けて

白石第一小でバザー開催

６月15日、白石第一小学校体育館で「白石第一小学校130周年記念バザー」が開催されました。

当日は、朝早くから入場待ちをする方もいるほどの大盛況。午前10時のバザー開始と同時に、大勢のお客さんが会場へ入場していきました。

バザーでは、食器やタオルなどの家庭用品、取れたてのキュウリやキャベツ、そして、お酒やクッキーなども販売され、大にぎわいでした。

このバザーの収益金は、白石第一小学校130周年記念誌の制作費に充当されるとのことです。

さわやかフェスティバル開催

健康福祉都市を目指して、６月28日、ホワイトキューブでさわやかフェスティバルが開催されました。

会場には、体力測定や相談などの健康づくりコーナー、ボランティア団体や福祉施設の展示即売コーナーなどが並んで、大にぎわいでした。

中央公民館で「ポレポレまつり」

６月22日、さまざまな知的障害者支援活動を展開中の地域生活援助センター「ポレポレ」が、中央公民館で「ポレポレまつり」を開催しました。

会場には、食べ物や輪投げなどのお楽しみコーナーが設けられ、ステージ発表も披露されて、300人近くの参加者が楽しくふれあいました。

ふれあいプラザで救命救急法講習会

ふれあいプラザで６月22日、白石消防署の救急隊員４人を講師に、救命救急法講習会が開かれました。

約50名の参加者は、けがや急病の際に救急車が到着するまでの対処法として、人工呼吸、心臓マッサージといった心肺蘇生法や止血法などを、真剣な表情で受講していました。

姉妹駅の復活を目指して

札幌白石区民が白石市を訪問

◀傑山寺の片倉景綱公墓所を訪問

７月５日･６日の両日、札幌白石区民約120名が白石市を訪れました。

今回の訪問は、白石区の小学生が抱いた、「札幌の白石駅と宮城の白石駅との姉妹駅関係をかつてのように復活させ、電車で旅行してみたい」という夢に賛同した同区の方々が企画したもので、中央公民館で行われた白石市民との交流会では、両白石駅の姉妹駅調印式も行われました。

訪問団は、白石城、碧水園なども見学し、傑山寺では先祖のお墓に手を合わせるなど、自分たちの祖先の地を踏んだことに感慨深げでした。

「無理なく楽しく」をモットーに

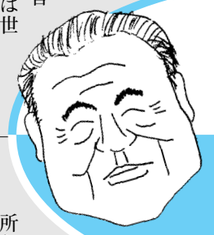
「ふれあいサロン」５周年

さまざまな地域福祉活動を行っている「白石市ボランティア友の会」の主要な事業の一つ、「ふれあいサロン」が５周年を迎えました。

６月29日、会員や「お客様」の高齢者の方など約50人が参加して、中央公民館で記念式典が開催され、歌や踊りで５周年を祝いました。

このサロンは、市内の一人暮らしの方や高齢者を招き、手づくりの昼食を挟んで、歌や踊り、ゲームなど、楽しいひとときを提供しているもので、お年寄りの皆さんも月１回のこのサロンを心待ちにしています。

川井市長の せせらぎトーク



水を守る

市内の薬師堂地区でホタルの里構想が実現した。かつて、この地区はホタルが乱舞する地域であったが、いつしかホタルがいなくなった。これには、二つ理由がある。一つは、農薬の航空散布で田んぼに小動物がほとんどいなくなったこと。農業振興と環境保全、板挟みになった私は、この問題を農協四連会長だった駒口盛さんに、直接話したことがあった。宮城県農業界の実力者は困った顔をして、いつもの歯切れの良さはなく、「御趣旨に添うよう努力します」と役人的な回答を受けた。何年か後にそれは世論となり、航空散布は中止された。

ホタルを滅ぼしたもう一つの原因は、大量の生活雑排水だろう。小川に流れ込んだ汚水は、ホタルが寄生するニナ貝などを死滅させた。農村部の下水道というべき、薬師堂地区農業集落排水緊急整備事業は平成九年に事業が始まり、平成十二年七月に完成し、清流は蘇り、二年前ゲンジボタルが大発生した。

薬師堂ホタルの里を守る会が最初にやったのは、不法投棄のゴミの収集である。驚くべきことに、ホタルの里構想の区域から集められたゴミは四トントラック五台分に上った。昔は白石川の右岸に洪水を防ぐための沈所があり、沈所と堤防の間を流れる細流と草むらがホタル狩りの名所だった。当時、我が家の裏の川の側に何匹もいたのであるが、大量に捕る時は、ホタルかごを持って沈所まで自転車をこいで行く。草むらにいるホタルを次々捕まえかごに入れる。家に帰ってカヤの中に放すと、眠るまで明滅していた。夏の夜の幻想的なホタルをぜひ白石川で眺めたい。

環境の汚染によっていなくなったもう一つに、モクズガニ、川の毛ガニがある。かつては、越河や小原の沢ざわにまでいたというが、ほとんどその姿を見なくなった。

最上川周辺では、今でもかに汁が秋の風物詩である。このモクズガニを再生させようという動きが出てきている。一つは環境NPOとして岩手県川崎村で行っているもので、ある程度まで稚ガニを育て、育ったものを砂鉄川に放流し、それが北上川を伝わって海岸で産卵し、もう一度戻ってくるという壮大な計画である。もう一つは、山形県山辺町である。これは、採算を目的としたもので、モクズガニと同類の上海ガニを養殖し、市場に出荷しようという事業である。川崎村にしろ、山辺町にしろ、水のきれいさがなければできない事業であろう。

小原地区活性化推進協議会の皆さん方と話をした。「この辺では、昔、モクズガニがいませんでしたかね」。聞いたら、「いや、昔はいっぱいいた。今は全く見えなくなった」というお話である。そこで、担当課の者を川崎村、山辺町などに派遣して、研究をさせてみた。きれいな水があれば休耕田を活用して、モクズガニあるいは上海ガニの養殖は可能である。

白石市の水と、白石型デカップリングとの融合がなしえれば大きな喜びである。幸いに、挑戦してみようという方が二人おいでになる。成功すれば、小原の検断屋敷など、いろいろな場所でかに汁が食べられるだろう。